

研究ノート：スコットの著作からみる

フィリピン山岳州の生活

木佐木 哲 朗

Notes: The Cordillera Way of Life through the Works of W.H.Scott

Tetsuro Kisaki

1. はじめに

筆者は、1980年以来、フィリピン・ルソン島北部の多様な少数民族が居住する山岳地帯で、社会人類学のフィールドワークを行ってきた。その山岳地帯は、大山脈という意味でスペイン語源のコルデイリエラ (Cordillera) 地域と長い間呼ばれてきている。ここに住む人々は、スペインやアメリカなどの植民者に加え、キリスト教化した平地民の影響を受けつつも、現在まで独自の多様な文化を比較的維持してきている。彼らは、差別されながらも誇り高く生きてきた人々なのである。彼らとは、北からイスネグ (Isneg)、カリंगा (Kalinga)、西のティンギヤン (Tinguian)、南東のボントック (Bontok)、その南東のイフガオ (Ifugao)、南西のカンカナイ (Kankanaï)、その南のイバロイ (Ibaloi) などの民族集団である。彼らの居住するコルデイリエラ地域が、現在のカリंगा・アパヤオ州、アブラ州、マウンテン州、イフガオ州、ベンゲット州、そしてイロカノ (Ilokano) やタガログ (Tagalog) など平地民も多く居住する中心地バギオ (Baguio) 特別市とほぼ重なっている。

アキノ政権下の1987年憲法で、コルデイリエラ地域のこれまでの歴史的経緯やその独自性ゆえに、ミンダナオ南西部のムスリム・ミンダナオ自治区同様、コルデイリエラ自治区創設の基本合意がなされた。そして、1988年自治区基本

法案が国会に提出され、翌年4月に下院で6月には上院でそれぞれ採択された。それを受け、1989年11月にミンダナオの13州9特別市で、1990年1月にはコルデイリエラの5州1特別市で住民投票が行われた。しかし、ミンダナオでは4州が賛成多数になったものの、コルデイリエラではイフガオの1州のみ賛成多数となった。そこで、南ラナオ・マギンダナオ・スルー・タウイタウイの4州のみでムスリム・ミンダナオ自治区は創設されたが、コルデイリエラの場合、1州のみの自治区は憲法違反だと最高裁判所が判断したため、コルデイリエラ自治区は現在まで創設されておらず、特別行政区のまま据え置かれている。筆者も注目しているコルデイリエラ地域の自治に関するさまざまな問題は、別稿[木佐木 1992、1995、2001、2002]を参照していただくことにして、本稿では、このコルデイリエラ地域の実際のムラの生活を垣間見てみたい。

コルデイリエラ地域といっても、その内部には多くの地域偏差があり決して一様ではない。しかし、彼らの多様な生活のなかに、フィリピンのマレー的原型が見られると考える。現在のフィリピン人の大多数は、紀元前後から数世紀までに南西方から渡来した新マレー系の人々であるが、主にキリスト教化し、スペインやアメリカの影響を強く受けて、生活が大きく変容してきている。それに対して、コルデイリエラ地

域の人々は、新マレー系の人々より以前に渡来した古マレー系の人々であるとされ、山岳地帯に比較的孤立して居住し外部からの圧迫にも屈することなく、基層文化を伝えてきたと思われるからである。コルディリエラ地域の研究論文や民族誌には、ジェンクス[Jenks 1905]やバートン[Barton 1919, 1930, 1949]など先駆者のもの、エガン[Eggan 1941, 1960, 1963]やキーシング[Keesing 1949, 1962]などアメリカの人類学者の先行研究、カウイッド[Cawed 1972]やボテガン[Botengan 1976]やプリルブレット[Prill-Brett 1987]などコルディリエラ地元の研究者のもの、大崎[1987]や合田[1989]などの著作等がある。そうした中で、マウンテン州のサガダで北カンカナイの人々と長い間暮らし、アメリカ人ではあるが準フィリピン人と見なされて、他の研究者にも引用されることの多い、数え切れないほどの著作を残して1993年に没したスコット博士(Dr. William Henry Scott: 1921-1993)に注目したい。

2、スコット博士の人物像

スコット博士の人物像を、アルカンタラ[Alcantara 1993]の記述による要約を手掛かりにまとめてみると、以下のようである。彼は、20歳でアメリカ海軍に加わり、第二次世界大戦のフィリピン海戦で艦船から初めてフィリピンを見たという。終戦後日本占領にかかわった後で、1946年中国の上海で除隊する。上海や北京で教壇に立ちながら中国語を学び、帰国してエール大学から中国語・中国文学の学士の学位を得る。その後朝鮮戦争にも従軍したが、除隊後コロンビア大学の大学院に籍を置き、アメリカ聖公会の信徒として宣教師らと共に行動する。1953年初めて、マウンテン州サガダのイゴロット(Igorots)と差別して呼ばれている人々のことを知り、翌年1月宣教師らと共に来比し、サガダの聖メアリー学校で英語と歴史を教え始める。彼自身の意図はともかく、アメリカの教育・文化によるフィリピンの統治政策の名残りがうかがえるというのは酷であろうか。

当初彼でさえも、ジェンクスの著作から、イゴロットとは槍をもち禪姿で、犬を食べ首狩りをする野蛮な人々という先入観をもっていたと

思われる。しかし、彼は教育だけでなくさまざまなムラでの活動に没頭し、イゴロットの男の子15人を引き取って自分の息子たちのように育てたり、アメリカ風の生活様式を捨てるとともに、ムラ共同体での生活に徐々に慣れ偏見からも解放されていった。そして、彼はシカゴ大学のフィリピン研究プログラムのエガン博士に招かれ、1957年一時帰国してマウンテン州の多くの文献を研究する。さらに、中世アイルランドの首狩りを行っていた人々がキリスト教に改宗した研究で、コロンビア大学から教会宗教史の修士の学位を得る。その後、またサガダに戻り聖メアリー学校の校長になるかたわら、周辺も訪ね歩いて調査し、コルディリエラ地域の民族誌やフィリピン史に関する著作を発表して評価されることになる。コルディリエラ地域で主に過ごしながらい、平地民文化の理解の必要性を実感しイロコス地方にも度々赴き、スペイン語を学びながらフィリピン史の調査研究を重ねる。その内1963年に、イロコスのフィリピン独立教会アグリパイ派のディレクターに任じられ、ルソン島北西平野部に移住して文化的衝撃を受けたという。そこで、イゴロットと呼ばれる人々の理解のためにも広範な歴史研究に没頭し、1965年フィリピンのサント・トーマス大学からフィリピン・先スペイン期の物質文化の批判的研究で、フィリピン史の博士の学位を得る。

その後、彼はまたサガダに戻り聖メアリー学校の短大で教えるが、そこが1970年に閉鎖されたために、ケソン市のトリニティ大学や聖アンドリュウ神学校に移る。彼は北部ルソンを中心に、アメリカ期やスペイン期から先スペイン期にまでさかのぼりフィリピンの歴史をひもとき、愛情と敬意をもってコルディリエラの人々の理解に努めたのである。多くの宣教師たちが本国アメリカに引き上げる中、彼はフィリピンに留まることを選ぶ。マルコス大統領時代には、コルディリエラの人々による反体制運動も起こり、彼の息子たちがかかわっていたこともあって、イゴロットの誇りを鼓舞する民族解放に結び付くような声明を出す。彼は、トリニティや聖アンドリュース、加えてサント・トーマスやフィリピン国立大学で、フィリピン史を教える外国人として注目されていた。ところが、1972

年の戒厳令で、彼の行動も問題とされ大学を追われたり、翌年1月には逮捕されボニファシオ基地に留置される。アメリカ大使館が解放に動き、軍や政府は彼を国外追放しようとするが、フィリピン人弁護士や、彼を学者・教師・作家・歴史家・音楽家などとして尊敬する一般フィリピン人、それにキリスト教会関係者や学生団体などの支援を得て、同年5月には疑いが晴れ釈放された。その後、サガダに戻った彼は、多くの群衆から歓迎され感激したという。1986年に公職からは引退し、多くの子供たちが育ち婚出していったサガダの家で暮らしていた。

彼は、フィリピンの文化遺産の理解に必要な、フィリピンの歴史学と民族誌学に多大な貢献をなした。とくに、コルディエラのイゴロットと呼ばれる人々からは、尊敬を集めている。キリスト教の浸透の是非はともかく、彼は人々が祖先から継承してきた文化を尊重し、不正義や政治的暴力に立ち向かって、対等な民族意識の認知や偏見をもたない人間的精神の開放を目指していたと思う。彼は、惜しまれながら1993年この世を去るが、イゴロットという単語を耳にして以来40年間、コルディエラの歴史と民族誌の理解に努めてきた希有な人物である。彼の著作に触れるだけでなく、筆者自身コルディエラの人々から彼の話を伺ったり、サガダに彼を訪ねて残念ながら会うことがかなわなかったりして、スコット博士に対する興味・関心は尽きない。拙稿にも多数彼の著作を引用させていただいているが、その分野の学問的権威であるからだけでなく、その著作が綿密な文献研究に加え長期間の調査による実像にせまるものであるからである。また、彼自身の人間性にも強く魅力を感じる。

そこで、1969年にマニラで出版された、マウンテン州の人々と文化に関する彼の初期の論文集“On the Cordillera”に注目する。この論文集は、彼が1950年代から1960年代にかけてさまざまな専門書に発表してきたものを集めたものであるが、その中で1950年代のサガダでの生活誌がもっとも垣間見られるものを訳出してみたい。「サガダでの少年時代(Boyhood in Sagada)」というもので、1958年の“Anthropological Quarterly”39巻3号と1963年“Silliman

Journal”10巻4号に掲載されたものである。

3、サガダでの少年時代

イゴロット (Igorot) の親たちは、フィリピン共和国・マウンテン (Mountain) 州・サガダ (Sagada) にあるミッション・スクールの校長に対して、「私たちは息子に体罰を加えることはないが、あなたにはそうして欲しい。」と言明した上で、彼らの息子たちを学校の寄宿舎に入寮させてくれるように、依頼する傾向が非常に強い。このことは、彼らが孤立した状態ではないということが、前の州知事ケーン (Samuel E.Kane) によって報告された「すばらしきイゴロット」の中にも示されていることから分かる。例えば、あるボントック (Bontoc) の老戦士が、彼の娘を「私は娘を学校に行かせて、綿布や禰の織り方を習わせたい。また、アボ (親愛なる先生)、あなたは彼女を打てる。しかし、私にはそんなことはできない。なぜなら、子供たちを打つというのは、私たちの慣習にはないからである。」という意見書を添えて、そこの州会議事堂に連れて行ったという [Kane 1934]¹。しかしもし、子供たちを鞭打つことが実際に子供をしつける彼らの元来のやり方ではなく、単に山地民以外の教師や役人によってもたらされたものであるとすれば、そのやり方がそれほど早くまた高く評価されるようになったことは不可思議なことである。

しかしながら、鞭打つことができないと推定すると、これは親としての権威の失墜という極端な例にすぎないと思われる。同じ学校の校長のもとに、次のように書かれた手紙が来ている。「拝啓校長様、私は息子をあなたの学校においてもらいたいです。そうすれば彼は教育を受けられるでしょうから。しかし、息子はそれを望んでいません。そこで、私は一体何ができるでしょうか。何卒、仕方ありませんので息子を学校から帰してください。」というものである。このような状況は、明らかに北部ルソンの人々に限られたことではない。ランドグラフは、英国領北ボルネオのある部族に関して、次のように述べている。「ムロット (Murut) 社会の親たちは、ヨーロッパや中国社会で見られるような、子供たちに対する親の権威を持ち合わせて

いない。よちよち歩きの幼児でさえ、そのムラの中では自分の親に強制されることはあり得ない。西洋人には驚くべきことのように思えるかもしれないが、ムルットの人々にとっては、彼らが自分たちの息子を学校に行かせることは強制できない。」という[Landgraf, 1956]²。

サガダ社会を観察すると、少年たちを実際に打つということは、少なくとも通常の慣習の一部であり、そうすることでイゴロットの若者は、立派なイゴロットの大人になると教えられていることが分かる。しかし、重大なる相違点がある。すなわち、体罰はその親たちによって加えられるのではない。それに代わって、ムラの長老たちにより認可され、青年たちから体罰が与えられることになる。聞くところによれば、自分の息子が隣人たちの哀れみを誘うことなしに、父親の鞭打ちに耐えられるほど十分に成長しているならば、そのような肉体的な体罰・矯正を息子に加えても、その父親は評価されることになっている。けれども、サガダの父親たちが得られるそのような尊敬はまれなことであり、このことはその失敗に関する真の困惑の理由が、イゴロットの伝統から外れた教育的な影響に求められるということをはのめかしている。子供のしつけに対する親の責任の基準は、栄養を与え、保護し、愛情をもって接するというようなことにある。一方、社会は男としての規律を教え込むために、他の手段を提供してきた。

サガダでの生活は、厳しい肉体労働を必要とし、イゴロットの農民はそれを冷静に受け入れている。家族を養い素晴らしい老後を送ろうとする人にとっては避け難いものとして、稲作棚田や山林でのしばしば苛酷になる労働の苦しみに、農民は耐えるのである。しかし、農民は避けることのできるいかなる努力・苦痛も、進んで受けたりはしない。農民は、自らが必要不可欠なものとはまでは考えていない目標を達成する夢の実現に、ほとんど時間を費やすことなく、「私は好んでいない」という表現は、活動を起こさなかつたり決断を下さないいかなる場合にも、その有効な理由づけとなる。かくしてイゴロットの父親は、子供を愛することと子供に苦痛を与えることの、基本的な矛盾・葛藤を味合

う。そして、自分の子孫との係累関係は、最大級の愛情でもって特徴づけられる。

イゴロットの人々は、確かに努力不足というわけではないけれども、望むほど多くの子供たちに恵まれてはいない。そして多分、赤ん坊が自分について社会から学ぶ最初の教訓は、自分が望まれ必要とされているということである。幼児期から、子供はかわいがられちやほやされる。また子供の最初の訓練は、年老いてぐったりしている身内の体の上によじ登ることである。子供は欲しいもののために泣き叫び、泣いて欲しがったものを手に入れる。もし子供が実際にその安全を脅かされるような何かを手にするのであれば、何か他のものを差し出されて子供は気をそらされることになる。そしてもし子供がそのようないかなるへつらいをも頑固に拒否するようであれば、子供の注意・関心が、子供を怖がらせるのには都合のよい何かに向けられるであろう。それは、大きな犬やカラバオ(水牛)であり、また「注射をする人」あるいは、そのような現代的なお化けに祝福された若干のムラでは、「ご覧、アメリカ人が来るぞ」というような脅し文句である。しかしそれでも、子供が「いや違う」と周囲の言うことを聞かなかつたり、母親が子供の面倒を見るのに料理などで忙しすぎる場合、その子供を捕まえようと多くの両手があちこちからしきりに伸びてくる。イゴロットの世界では、子供は大人のおもちゃなのである。

民間伝承を通して、親たちは彼らの子供たちに最良の食糧と愛情こまやかな注意を与える義務を思い出させられる。そして、子供たちもすぐにこれらの物語を学ぶことになる。例えば、鳥たちはどこから来たのかとか、最初に猿を作ったのは誰かというような質問に対しては、獣に変身した子供たちの凄まじい説明が与えられる。なぜなら、残酷な親たちは子供たちを働かせ過ぎたり食糧を削ったり、あるいはその両方だったりするからである。ある少年は、自分自身の骨を折り薪として投げ出し、そして鷹を飛び立たせる。ある少女は魚になるという。なぜなら、両親が彼女の選んだ若い男と彼女を結婚させたくないから。もし、イゴロット世界にノアの箱舟があったなら、うるさく小言を言った

り気が短く怒りっぽい親たちの悪習を我慢するより、その生活を好む一対のカタツムリやヒルやスズメでそれは満たされるであろうに。今日サガダの親たちの中には、自分たちの身の上にもそのような災難がふりかかると思っている人はほとんどいない。自らは関与していない特別扱いを家庭にもたらしうような、そのようなやさしい行為で子孫を養うとか、野生のコケモモやトウモロコシの実のつく軸を好んだり、あるいは多分神様のようなアメリカ人たちが食べている、神々の食物であるケーキやパンのように「店で買える」贅沢品などを好む者は、まだほとんどいないのである。

サガダの家は、冬の数カ月間の冷え冷えする真夜中の気温から住人を守るように設計された、暗くて煙たく小さな汚い家屋である。そして、子供はできるだけ早くから、またしばしば、自分と同年輩の者たちと一っしょに太陽の下で跳びはねるように、家から出て行く。彼らの世界では、子供は自分の両親の援助や保護なしに生きて行くことを学ばねばならない。というのは、イゴロットの大人は子供たちの遊びに口出しすることもなく、あるいは遊びを教えるようなこともなく、子供と距離をおいているからである。このような意味での干渉は、学校の教師や外国人の宣教師たちによってなされるものであるが、変わりつつある世の中に自らを合わせようと努めている親たちにより、穏やかな興味をもって知られるようになった。しかし、もし子供たちによる秘めやかな恨みがそのような干渉に向けられるとすれば、それは互いに苦いものになってしまう。子供の遊び仲間の中で、少年はグループの者たちが何をしがっているかを見極められる人に、信望が集まるということを早くから学ぶ。また、もしそのことを頑強なまでに主張したならば、自分がやりたかったことをかなり上手にやることができたと、家庭の中でも学ぶことさえあった。他より優れているものを学んだと思っている、サガダの大人の個性的特徴を、認識することは困難である。

小さな子供たちの遊びは、直接的に時には間接的に、親たちの食糧獲得の先有権を反映している。そして実際非常に直接的であるので、この点での仕事と遊びの違いは完全にぼかされて

しまう。男の子にとって好ましい遊びであるおもちゃの稲作棚田を作ることに加えて、それでもって家族の食糧貯蔵をかなり増やすことができる魚を取るための罟網を作ることを、少年はすぐさま続けて学ぶことになる。そしてこのような魚取りは、いつでも取った本人の財産と見なされ、彼が好むものがあれば他のものとそれらを自由に交換できるものでもある。家族全員のためには少なすぎる魚を彼が家にもってくるような時には、それらは彼や年下の弟や妹たちのために料理されることになる。川の流れに沿ったムラでは、このような子供時代の活動によって、少年たちは水の中でそれほどまでに長くいられるようになる。そして棚田で泥まみれになってあくせく働く大人になって初めて、水浴と遊びの違いが分かるようになるのである。

年長者たちの個性について子供がとやかく言うことはないが、どちらか選択しなければならぬような場合ごくまれに、子供の意見が考慮されることもある。ペドロのごとく大きくそして強く成長するように、自分で取った食べ物を食べるよう奨励されることもあるだろう。しかし、耳たぶに赤い花をさし金持ち男の息子のように気取ったホアンのごとく、シャツを二枚重ねて着ても注意されることはあまりないかもしれない。確かに、身長4フィートのジュリアンが3.5フィートのミゲルより小さな荷物を運んだなどと、公然と指摘されることは決してないだろう。しかし、他人から怠け者だと陰口をたたかれたり、両親に自分の家の中で私的に戒められることはある。イゴロットの少年に向かって「恥を知れ」と言ったり、彼のことを「めめしい奴」と呼んだりするのは、皆その同じ年齢集団のメンバーだけである。しかし、この集団に少年は、早くからまたしっかりと自身を帰属させるので、彼が価値あるものと見なすものは、概してその集団が価値を認めるものと同じになる。そのような事を疑うイゴロットの老人たちでも、「自分の遊び仲間たちも皆禪をもっていた」ので、自らも禪を身につけるようになったという子供時代の動機づけを思い出すであろう。ポントックの村々では、同様の拘束力が割礼のような重大なことがらについてさえ拡大され影響を与える。過去におけるそのような執行

の際中に、臆病な幻想にかられたかもしれない小さな少年たちのグループは、皆いっしょに居て、どの年長者の技術もすぐれたものと推薦されるに足りると思いつもうとする。しかし、非儀礼的な執行の後では、少年たちの父親は事実を認識して、その結果を外科的に補う必要があると学ぶことになる。

家族や村の名誉を傷つけられたことに対する報復は、イゴロットの社会では首狩り戦争の背景として最近でもなくてはならないものであるが、それを反映していかなる争いにおいても自分の遊び仲間打ちに打ち負かされた少年が、再戦をいどみ厳しい賠償を要求するのは、きわめて当然のことと考えられている。彼らはそのように当然のごとく考えるので、村の安全を脅かすようなことを非常に嫌い、子供に辱めを受けるような経験をさせないようにあらゆることに気を配る。大人は、子供が当惑しないように綿密に手配する。そして賢明な古老たちは、「子供たちは惑わされることを好まないということを、我々大人は認め理解すべきである」と指摘する。子供たちは、組に分かれても成績や結果をつけることなく、何時間も遊び続ける。そして大人たちは、そのようなゲームの勝敗を無視するか、競争の結果をつけさせないようにする。現代のイゴロット社会では、試験で72%ほどの成績を修めても、宿題をしてこなかったりした者など平均して30%の生徒を落第させたりする。また、もし歌唱コンテストを行った場合、一番上手な者だけを選んで満足するのではなく、一位に380点、二位には378点などというように、それぞれ表彰して参加者全員に栄誉を分け与える。競争であれば負ける者もいるかもしれないが、誰も面目を失うようなことはないようにする。

家族集団を作り、子供に弟や妹たちの面倒を見させ責任感をもつように早くから教えることで、親の愛情というものはより大きなものとなる。イゴロットの子供は、自分が弟や妹を背中に背負ったり、赤ん坊にあげるべきゆでたサツマイモのように、何か大切なものをおごそかに分け与えられるようになるまで、一人で歩くことはほとんどできない。またとくに男の子は、性別や血縁の違いによって、自分が属していない集団のことを早くから学ぶ。5、6歳ごろか

ら、男の子は自分の姉妹とも遊んではいけない。そして、青年期を通しずっと、異性を暗示させるようないかなる状況のもとでも、男性は女性を避けるようになり、毎日の生活の大半、女性たちの前では、男性はわざとみだらな話をしたりする。より保守的な村々では、そのような忌避的行動はまた、自分の兄弟にも向けられる。テテッパン (Tetep-an) 村では、兄弟は田畑での労働交換を行う集団化の際に、同じ労働グループに加わることはない。そして中央ボントックでは、兄弟たちがお互いに近くに寝ることさえないだろう。このような慣習パターンの名残りは、サガダにおいては、結婚年齢に達した兄弟たちが、同じ気の合う仲間同志のグループにいっしょに入ることはないだろうという事実にも現れている。

自分の父親と一緒に鍛冶屋へたまに遠出したり、年長の少年たちと共にカラバオ (水牛) を放牧しに同行したりする場合を除いて、成長しつつある少年は、食事や睡眠のために家へ戻るときにだけ、遊び仲間との行動を別に制限される。7、8歳までの間、このように気ままな仲間と一緒に生活が続く。それから突然に、ダップアイ (dap-ay)³ のひとつに帰属しそこで寝るために、家を離れなければならないという衝撃的なことが起こる。この時まで男の子は、自分の両親と一緒に同じ家の中でずっと寝てきた。実際赤ん坊のごとく、寝るときには両親に挟まれてすがりつくように眠り、またいつでもどこでも眠くなったら、体を丸くして寝入ってしまう。しかし、年長の兄や姉は、弟や妹と一緒に家で寝ることは決してない。夜になると、兄姉は家ではなくどこか別の場所に寝に行くことになる。ところが大きくなりその時が来ると、彼もまた、両親の家での子宮の中のような安心も、鳥のように自由だった毎日の気ままな遊びをも、諦めなければならなくなる。彼は、自分が帰属するダップアイで他の少年たちと一緒に寝るために、家を離れなければならない。

ダップアイは、一種の男性クラブハウスである。年少の少年は、父親や祖父が体を自由に戯れ合いながら休ませるのに、そこが最も適しているのをいつも見てすでに知っており、またそこで大人たちの、大変込み入った慣習的な話

に2、3分間魔力にかけられたごとく耳を傾けたり、再びすぐに遊ぶために小股で走り去ったりするものであった。しかし、ダップアイが過去において彼の生活にどんな意味をもつていようと、あるいは未来にどんな意味をもつていようと、その時々においては、それは彼の新しい寝場所として真っ先に心に浮かぶものである。なぜなら、ダップアイは、未婚の男性のための寝宿だからである。

ダップアイの舎屋は通常小高い所に立っており、その最も際立った物理的特徴は、約10フィート四方の平らな石壇をもつことであって、事実中央ポントックでは、ダップアイという言葉が、まさに石を敷き詰めたところを意味するのである。寄りかかるのに都合の良いような角度で地面に立て掛けられた石で、敷き詰められた石壇の周囲は囲まれており、昔首狩り戦争に成功した記念として、あちらこちらに石やシダ類の木の柱が立っていたり、時にそれには人間の頭のありのままの姿の彫刻が施されていたりした。この石壇の上に隣接して、アボン (*abong*) すなわち実際の寝宿があるが、それは他の目的ではなく特に寝るために適した建物である。アボンの中は天井が低すぎるので人が直立することはできないが、しっかりと石の間の隙間を泥で埋め、夜の低温対策としてほとんど密閉状態であり、結婚した世帯の天井の高い木製の家屋とは異なる建築様式をもっている⁴。アボンの中にあるベッド自体は、平板を並べたものである。また村々の中には、しばしばアシで織った筵のようなより低いベッドもある。それは持ち上げられ、害虫を楽に追い払えるよう簡単に設置されており、また寝る人の身長にしたがって、頭と足のある部分を2センチほど高くするように、それぞれ両端を頭支えや足のせとして同じような形にしている。ベッドは床(地面)から離れており、一方の端かあるいは中心には、夜の間アシなどを燃やし続ける小さな炉があり、そこで眠る人々の裸の体を暖めいぶし続ける。今日では成人も少年も、イゴロットの人々が英語からの借用で「ブランケット(毛布)」と呼ぶ、薄い綿の覆いで体を一般に包んでいるけれども、ちょうど一代前までは、夜中でも戦いに備えいつも万全を期して、跳び起きるのに妨

げとなるいかなるものも禁じられていた。

寝宿の中で夜ずっとアシなどを燃やし続けるのは、そのダップアイにいる最年少の少年たちに割り当てられた仕事である。彼らはママオ (*mama-o*) という階梯に属し、より大きな少年たちと区別される。一方より大きな少年たちの階梯は、マンモン (*mangmong*) と呼ばれ、その仕事は外の石壇の中央にあるダップアイ用の炉に早朝くべる薪を集めることであって、目覚めたばかりの男たちがその炉を囲んで暖をとるのである。イゴロットの人々は、眠っている間に大変動く。列をなして寝ている者たち全員、誰かが真ん中に割り込んできたら、無意識のうちに寝返りをうつ。そして、痩せこけた老人たちは、かわいそうな仕事を担わされたママオに火を絶やさずくべ続けるように要求しながら、硬い板の上に寝ているので、寒さとその体への圧迫からしばしば目覚めさせられる。ダップアイに入る以前の自由気ままな少年にとって、新しい生活のこの特殊な厳しい側面が、変化に対する真の抵抗をいくらか吹き込みつつも、いやいやながら自らを律して耐えるように強制させることになる。昔は、実際このような強要が、入るのを渋ったような場合しばしば必要になった。

すべてのマウンテン州に居住する人々は、年下の兄弟姉妹を母親が妊娠している間、赤ん坊のように純真無垢ではなくなった子供が、性的なことを考えることはみだらで良くないことと見なしている。そして、家族のすべての未婚の者たちが小さな同じ家の中で寝ることを許されているベンゲット (*Benguet*) でさえも、彼らの両親は他の者たちが皆寝付くまで注意深く待って、その後で家族の成員をより増やす意図をもった性交渉を楽しむことになる。バウコ (*Bauko*) では、自分の両親の性交渉を見てしまった子供は、病にかかり死んでしまうだろうと信じられており、またサガダでは、そのように子供に見られた性交渉は実を結ばないだろうと皆一様に考えている。今日、とくに伝統的ではない空間デザインをもった家に住むような、増加しつつある「現代的」サガダの家族は、自分たちの息子をダップアイで寝る同年代の者たちに強制的に加えようとはしないが、ほんの10

年くらい前までは、ダップアイの年長者たちによる制裁が依然として請われて行われていた。罪を犯した場合その中で寝るべきではあるが実際には眠れなかった、ダップアイの年下の少年たちは、自分が両親と同じ部屋でそれまで寝ていた家の外側に集まるために夜明けには遣わされ、次の言葉で始まる唄を歌ったりするものだった。それは、“*sot,sot.ak ak sot*”という歌詞であり、その文言のひとつは性交を意味するみだらなものであって、他は性交に伴う擬音語である。またこの唄は、自分の母親の長い陰毛の一部で鳥を捕るための罫を作るということ、違反者にほのめかすものでもある。このような対処の仕方は、100%効果があったと報告されている。

マンモン階梯に進む場合には禪を身につけるか妻を娶るかということになるが、ダップアイそのものに入る成員資格は、年齢によるのではなく、むしろいろいろな考えに基づいた一種の世論によるのであり、少なくともその少年自体の不確かな個性によるものではない。すべての少年は、自分たちより上の年齢集団に進みたがり、長老たちが彼らは十分成長して今や次の階梯に進むべきだと決める際に、彼らの行動や情熱が影響を与える。弟を自分に替わりアシ集め階梯（ママオ）に入れるということは、自身は薪運び階梯（マンモン）に昇進するということ、をほのめかすことになる。少年期、青年期、壮年期を通してずっとイゴロットの人々は、人生の通過過程に関し厳然とではなく適当にふるまうが、ある階梯から次のそれへ進む場合、儀礼を必要とすることもなく、あるいは年齢や体格などもこれといって決まったものはない。西洋の学生に方言に関してかつて尋ねられたある生徒は、英単語の「成熟した」という意味を暗示する用語で、彼の同年代人の誰かではなく、彼が自分自身を呼ぶ理由を述べることで、困難であると分かった。その用語は、身長や年齢や学校での学年とも関係がなかった。その後まもなく、この少年は学校を去り、(小学)7年生の級友の子供の父親となった。

ダップアイでの生活に入った最初の頃は、その若い新成員に対してさまざまな考慮がなされる。また、後になったら非難やあるいは実際の

体罰を招くようなことでも、多くの無分別が許される。夜の幽霊がたくさん出そうな闇の恐ろしさは、公衆衛生の利益が優先されるというよりも、より近いダップアイの敷地を清めさせるために非常に若い者を動員させることになるが、それは普通のことではあっても好ましくはないことと考えられており、年長の少年は不相応な年齢⁵で、それをやるよう強いられることになるだろう。しかしながら、この種の考慮を受けることとそれを示すダップアイ成員の年齢との間には、反比例の関係がある。そして、新成員のまさに同年代人たちは、同じ舟に皆一緒に乗っている者同士と見なされ、また彼が自分の価値を引き出すように期待している。家での子供じみた気まぐれに対するいかなる抵抗をも打ち砕く苦しそうなわめき声であっても、ダップアイの中では、子供のわがままを助長するようなことにはならず、そのわがままが大目に見られることさえない。「イヤだ！」と泣き叫んですばやく逃げようとするのが常である少年は、同情的な傍観者にささやくだけの諦め気味の父親をそのままにして、「僕に一体何ができるの？」と言いながら、まったく歓迎されないそのような体を動かさず気晴らしを見つけた、足の早いダップアイの仲間によって、追跡されている鹿のように、今や追い詰められている。体の背中や足の部分についた大きな筋肉が、後遺症を残すことなく体罰に耐え得るほど十分に、少年がすでに成長していると考えられれば、長老たちの命令や承認がなくても、そのような体罰は年長の少年たちによって加えられる。年長の少年たちは、年下の少年たちに割り当てられた燃料の薪を持って来させたり、このような懲罰に直接従わせたりすることに失敗することもあるが、体の繊細な部分に唐辛子を塗り込んだり無理に自慰行為をさせるような悪質な行為で、その小さい少年たちを泣かせるいかなる人に対しても、年長少年たちは責任をもって懲らしめるよう取り計らう。他の人を手で殴ることは、イゴロットの人々の間では簡単に行われることではなく、体罰は注意深い慣習法的な手続きを経て加えられる。大人たちの認可を得た唯一の少年時代の闘いは、昔日の戦争時代を思わせる、例年行われる儀礼的戦闘（年中行事）で

ある。それは、参加者が命をかけて体を殴り合う、実戦さながらのものを真似た闘いである。通常、互いの攻撃は、家族の間の悪い血を呼び覚ます。それ故、いかなる犠牲を払ってでも、真の争いは避けられるように努める。

ダップアイの成員である少年は、燃料薪を集めること以外にも他に課せられた仕事がある。そのもっとも一般的な役割のひとつは、ダップアイに夜戻って来たら、長老たちの足のかゆい所をかくことである。田畑や山での裸足での労働生活のおかげで、イゴロットの人々の足の皮膚は厚くなり、夜寝入る前に革底のような足の裏を棒でかいてもらうのが、彼らの楽しみになっている。また一日の激しい労働から戻って来た男たちは、背中や脚部、足や指などを揉んでもらうように要求するが、この男たちへのサービスは大きな少年たちの仕事であり、一方小さな少年たちには小さな少年たちがサービスをする。より小さな少年たちの雑役の中には、宗教的な慣習と結び付いたものもある。すなわち、その間は労働や旅行が禁止される休日を、村中に触れ回るため彼らが派遣されたり、そのような休日のタブーを守らなかった人に課せられる罰金としての鶏を彼らが集めるが、これらのことがそうである。彼らは時には、豚や鶏を供犠する際に長老の司祭たちの手伝いとして駆り出されたりするが、この義務のために、用意された肉の特別な意味をもつ部分の一部を報償として割り当てられる。供犠するのを幸運にも手伝えることで、そのような躊躇をしない同年輩者を避けるのには骨が折れるのだけれども、この供犠された肉の分配計画は、実際非常に明確なものであり、妬んでいる年上の少年が割り当てられた肉を年下の者から盗んでも、自ら品位をおとすようなことにはならないだろう。

毎夜いっしょに寝ている少年たちが、ある種の同僚意識を發展させることが期待されているが、ダップアイ活動の目的も成果も、真の意味のいかなるダップアイ団結心の發展にもつながらない。日中ダップアイの成員たちは、それぞれ思うがままに生活しており、両親や親類の家で食事を取っている。そして彼らは、自分たちと同年齢の子供たちがたまたまたくさんいる、ダップアイ（自分の帰属するそれとは限ら

ない）の周囲で遊ぶ傾向がある。中央ボントックのより保守的な村々では、父親のダップアイに帰属する兄弟たちはいっしょに寝たり遊んだりしないという事実が、そのようないかなるダップアイの団結精神をも阻止するように実際作用している。もし少年たちが時折行われる集団間の競争や闘いのために団結するとしても、互いに親密なくつかのダップアイが、町の他の地域にあるダップアイの連合に対抗するときである。そのような競争の後で、彼らが夜になって戻ったら、得意満面だった勝者たちでも、彼らの団結心のために賞賛されるということは期待できない。その代わり、彼らの中の年長者たちは、黙想にふけりながらパイプ煙草をくゆらせて、あるいはそのような無頼な行いに関して敵対者を評しながら、「傷ついたお前たちのいこの一人のことを想像して見る」というような、真剣な大人たちの会話を聞くともなく、ぼんやり空を見上げたりするだろう。

村の宗教生活の大半は、ダップアイを中心に行われる。そして、そこに帰属する少年たちは、首狩りの時代に遡る、祈祷の内容や長い神話や連続した供犠の詳細について、語られながら成長する。ダップアイが、戦争に関する共同体の知恵が詰まった神聖な場所であった時代があった。そして、そこは敵の狩られたばかりの首が置かれる唯一の所であり、事実黒魔術の影響を受けているが、ダップアイに敷かれている石のひとつのすぐ下の埋葬地の前は、霊的に病から予防されることができた。首狩りが三世代も前のことになってしまった今でさえ、まさにその石が、ダップアイに集まる資格を得た成員の幸福のために、直接祈願の対象になることからして、その石壇には神聖な雰囲気脈々としみついている。ダップアイがかって永遠の責務として町を守る団結小屋であったという事実は、少年らしい騒動が長老たちによって抑えられるその厳しさの中に反映されている。それは、ダップアイの中でぶらぶらしている男性の大人が、近くの田畑から危険を感じて女性が泣き叫ぶのに対応するよう期待されていた時から、あまり変わってはいない。

成長過程にあるイゴロットの少年には、ほとんどあるいはまったく直接指導は与えられな

い。彼は、模倣することで、あれこれ立派な大人の生活に必要な技術を習得する。その上、年長者たちは彼らが積み重ねて得てきた世の中のそのような知識を、少年に故意に伝えようとはしない。その代わりに、彼は大人の会話に耳を傾けることによって、自分自身のための情報を集め、彼が彼個人の洞察力の鋭さでもって、一般的に種々雑多なものから選び出した妥当性のある特別なものも得る。しかしながら、彼のいる前ではけっして論ぜられないことがひとつあるが、それは生殖に関することである。彼は自らの愛情表現において、青年期の同時代の人々に、仲間として援助してもらうようすでに頼っていた。そして、彼の好奇心がより進展した段階にまで十分に盛り上がると、今度は彼は求婚する若い男性の中で最年少の権威者として振る舞わねばならなくなる。この事柄に関して既婚の男性たちがずっと沈黙を守ってきたのは、子供世界の関心事に大人は距離をおくというイゴロットにありがちな問題ではない。マウンテン州では、求婚過程の一部は性的な交渉であり、ここに至るまでには様々な態度を示す種々の集団が巻き込まれる。両親は、この接触を子供をもうける結婚を意識する最初として見なしており、若い少女たちは年長の姉妹たちから、真剣な気持ちではないかもしれない若い男性たちのより以上の接近を避ける、最善の方法を忠告される。一方、若い男性たちは自分たち自身に父親としての責任を課す前に、このようなある経験（性交渉）を楽しむという望みをしばしば抱いている。また彼らは、この目的を彼らに達成させるような生物学的な知識をしきりに追い求める。若い未婚の男性たちとこの件に関して議論をするどの大人の男性も、道徳的弛緩を促進したり、赤ん坊の誕生を妨げたり、結婚の基本目的を欺いたり、現実的な生物学的絶滅を村に招くかもしれないというような、公的な非難を受ける危険性をはらむことになるだろう。

ダップアイでの訓練のどの段階でも、イゴロットの公民・市政学に関する正式な模範は欠けているが、サガダの若者は、彼が最も初期の子供時代の遊び仲間の中で最初に学んだ、より良いある教訓を覚えている。それは、皆がやりたがっていることをやりたがる人に、最大の評価

が与えられるということである。不名誉の最も一般的な形容詞は、通常「残酷な」と翻訳される *kedse* である。しかし、それは英語で、生意気な・強情な・反抗的な・攻撃的などという意味を表す場合にも同時に用いられている。*ma-kedse* な人々は、しばしばわがままであるが、彼らが社会に払う犠牲は小さいものではない。侮辱は、罪悪の地域的規準（慣習法）によれば、暴力をふるうことの次に重大なこととしてあげられているけれども、「いつも中心でいたい」とか「身の程知らずの自惚れた」人は、過去の大失敗に関して公に非難されたり、難なく共同体の意見を心に銘記できる才能を十分に備えた年長男性によって、自分の祖先たちの犯した道徳的過失を思い出させられる危険さもある。

もしダップアイが、その中でイゴロットの若者がしつけられる教室のようなものであるとすれば、そこでの年長者の教えは法体系のひとつである。たとえば、長老会議の（慣習）法的決定が彼の父や家族の他のメンバーに対してくだされた時でも、若者は口を閉じて動かずに座っていることを学ばねばならない。現代的なキリスト教への改宗者の一部は伝統社会の経済的統制から免れてきたけれども、すべて大人の男性は村の中に複数あるダップアイのひとつ—通常彼らの家に最も近いもの—に必ず帰属しなければならぬという理念は今でも残っている。そして、年中行事の儀礼を通して必要とされる供犠動物は何であろうと供出することで、また人生の晩年には長老会議に加わることによって、その慣習は支えられている。そうして家族のすべてのメンバーが、ダップアイ会議の裁定に従うよう期待されている。異なるダップアイに属する者同士の訴訟の場合、会議は裁定をくだすために両ダップアイから長老たちが招集されることになるだろう。イゴロットの人々は、その利益が多分全共同体の福祉につながる団体の前で、家族の忠誠を誓わせるべくしばしば苦言を聞きながら成長するが、会議のメンバーとの血縁関係が、裁定の結論を出す際何も考慮されることはないを知っている。実際、訴訟人はある長老にしばしば全権を委ねることに同意する。その長老は、以前から公平な人であると評されており、彼らは敵対者に関する不必要に多い判

断材料を含んでいるかもしれない会議でより、その方がより公平な判決を受けられる機会になると判断しているからである。しかし、昔のイゴロット社会ではまた、隣人の裏切りを恐れることなしに生活が続けたり、山の反対側の敵対する村への首狩り攻撃に執着することを指図したり、長引いている村内の反目の犠牲にならないように安全を確保した上で子供たちを家の外で遊ばせるようにするということが、まさに村の規律に従うことであると認識されていた。

注

- 1、Thirty Years with the Philippine Headhunters, ch. xxvii (1956)。
- 2、Landgraf, John L., Interim Report to the Government of the Colony of the Department of Medical Services, 1954-55, para. 3.20 (1956)。
- 3、ボントックでは、アト (*ato*) と呼ばれる。ジェンクス (Jenks, A.E.) の *The Bontoc Igorot* (1905) を参照。
- 4、多くの成員をもつダップアイにはふたつの舎屋があるかもしれない。ひとつは、年長男性たちが常に出入りする「古参用」のものであって、そのダップアイの宗教的道具類が収めてあり、特にアロン (*along*) と呼ばれることもある。
- 5、若者にはどの年齢でも、適当なものとして特に黙認された罪があるようである。ボントックでは、穀倉に入り酒を盗むというかなり重大な罪でも、もし酒への興味が期待されるような年齢に達した少年がやったとすれば、笑ってすまされることになる。

4、おわりに

フィリピンの基層文化を考える意味でも、コルディリエラ地域の生活を垣間見ることは有意義である。スコット博士の多くの著作の中で、サガダの民族誌の一部を見てきたわけであり、不完全な研究ノートにすぎない。しかしそれでも、ダップアイを要にしたムラの生活様式や人々の価値観の核心の一端がうかがえる。それは、彼らの躰を通した親子関係の特徴や祭祀集

団の重要性、性別や年齢・世代別原理、体罰・競争・名誉・侮辱・労働・休日等に関する考え方、長老合議による慣習法的自治など、変容しつつも基本的には保持されているものである。今後、彼のコルディリエラを中心としたフィリピン史を踏まえた上で、他の民族誌も再検討する必要がある。

《参考文献とスコットの主な著作》

- Alcantara, E.R.E. 1993 Biographical Note on W.H.Scott, of *Igorots and Independence*, ERA, Baguio City.
- Barton, R.F. 1919 Ifugao Law, *American Archaeology and Ethnology*, Vol.15, No.1, University of California Publications.
- 1930 *The Half-Way Sun: Life among the Headhunters of the Philippines*, New York Brewer & Warren INC.
- 1949 *The Kalingas: Their Institutions and Custom Law*, The University of Chicago Press.
- Botengan, K.C. 1976 *Bontoc Life-Ways: A Study in Education and Culture*, Centro Escolar University, Manila.
- Cawed, C. 1972 *The Culture of the Bontoc Igorot*, MCS Enterprises Inc., Manila.
- Eggan, F. 1941 Some Aspects of Culture Change in the Northern Philippines, *American Anthropologist*, 43:11-18.
- 1960 *The Sagada Igorots of Northern Luzon, Social Structure in Southeast Asia* (G.P. Murdock, ed.), Viking Fund Publications in Anthropology No.29:24-50.
- 1963 Cultural Drift and Social Change, *Current Anthropology*, Vol.4, No.4:347-355.
- 合田 澁 1989 『首狩りと言霊-フィリピン・ボントック族の社会構造と世界観』弘文堂。
- Jenks, A.E. 1905(1970) *The Bontoc Igorot*, Bureau of Public Printing, Manila (Johnson Reprint Corporation).
- Keesing, F.M. 1949 Some Notes on Bontok Social Organizarion, Northern Philippines,

- American Anthropologist*, 51:578-601.
- 1962 *The Ethnohistory of Northern Luzon*, Stanford University Press.
- 木佐木哲朗 1992 「伝統的自治慣習と地域自治に関する覚書」ふいんど社会人類学研究会編「ふいんど」第5号, 風響社.
- 1995 「少数民族の、あるいは、地域の自治に関する一考察」県立新潟女子短期大学北東アジア地域研究会編「北東アジアの諸問題」.
- 2001 「フィリピン・少数民族の自治と開発問題に関する若干の考察」『県立新潟女子短期大学研究紀要』第38集.
- 2002 「フィリピン・コーディリエラの土着的政治制度と自治の可能性」『県立新潟女子短期大学研究紀要』第39集.
- 大崎正治 1987. 「フィリピン国ボントク村一村は「くに」である一」農山漁村文化協会.
- Prill-Brett, J. 1987 *Pechen: The Bontok Peace Pact Institution*, Cordillera Studies Center, University of the Philippines, College Baguio.
- Scott, W.H. 1969 *On the Cordillera*, MCS Enterprises Inc., Manila.
- 1974 *The Discovery of the Igorots*, New Day Publishers, Quezon City.
- 1975 *History on the Cordillera*, Baguio Printing & Publishing Co., Inc.
- 1982 *Cracks in the Parchment Curtain and Other Essays in Philippine History*, New Day Publishers, Quezon City.
- 1984 *Prehispanic Source Materials for the Study of Philippine History*, New Day Publishers, Quezon City.
- 1986 *Ilocano Responses to American Aggression 1900-1901*, New Day Publishers, Quezon City.
- 1988 *A Sagada Reader*, New Day Publishers, Quezon City.
- 1992 *Looking for the Prehispanic Filipino and Other Essays in Philippine History*, New Day Publishers, Quezon City.
- 1992 *The Union Obrera Democratica: First Filipino Labor Union*, New Day Publishers, Quezon City.
- 1994 *Barangay: Sixteenth-Century Philippine Culture and Society*, Ateneo De Manila University Press.